

編輯者の辭

敗戦後既に約一年を経過したが我國の現狀は悲慘と混乱を極めてゐる。全く手のつけようもない状態である。文化の復興、學の振興が唱へられ、祖國を此荒蕪から起すものは只學の振興あるのみとさへ言はれてゐる。然し未だ、海軍選こき建設の氣運の感ぜられざるものがない。天々悠迷、混沌あるのみである。

吾々學徒も亦此慘澹たる敗戦國民大衆の一人であり、此の混乱正に社會の成員一人として飢餓の脅威にさらされてゐるのである。

然し吾人の追求する學が眞に其名に値するものであるならば、必する悲慘な境地にあつても益を求められねばならぬであらう。衣食足つた後の困事業ではない筈である。

學が眞の學である後には、それは「ホリスの學」になければならぬ。とは名哲アリストの言葉である。ホリスから遊離して「スモホリスの學」となつたとき學の墜落が招來されたのであつた。眞に深い「ホリスの學」に足初めてホリスを越えたる普遍性を獲得し得るのである。

西洋近代精神の特色は人間と自然とを截然と區別して自然を自然とし、全く客觀的に觀ること

に依つて、そこに法則を見出し、自然を再編成する機械文明を作つたことにある。而してこの近代精神の最終的段階として人間社會をも人間と區別し之を客觀的に觀ることを吾々は課せられるものがある。

學の歴史を見るに、其時代の精神に直結してゐるときが、學の最も達し實り多き時である。それは學は神のものでなく、純粋に「人間」の所有に属するものだからである。學が發展すると共に「人間性」を脱却して行く抽象的なそれ自身を獨立する一團の結晶體となる。これが所謂純粹學問であるが、吾人は此の時代精神から純粹學問を晶出せしめる過程にこそ正に「學の本質」があるものと信ずるものである。

吾々の學が追求するものは單なる論理の整合性ではなく、この現實の内、この肉體の重荷を負ひつゝ、苦しむつゝも、尚ほ且つ高く、イデアを求めて生き行く必要ならぬ、自己の實際的な生命そのものなのであるから。

蓋し學の本質がさうである如く、統計學も又單に論理の整合性や理論の完備性のみを求めて行くべきではない。それは正に其の名の如く、Stateの學即ち「采りの學」でなければならぬと信ずる。吾人の生きて

ある現實即ちポリスに対する科學である。現實の混沌から結晶に成るものではなくはならぬ。

かゝることを可能ならしめる道は、理論家、實務家と縄張りを設けた固執する sectionalism には断じでない。

吾人は「講究録」を発行すること既に6号に及んでゐる。これは單に研究所の業績を発表せんが為のみではない。吾人は象牙の塔を、精神的貴族主義を標榜するものではない。吾々の研究所を以て、その在るべき正しき位置、即ち數學者、理論統計學者と實地應用統計方面の實務に於ける人及び知識階級——との接觸、合流点たらしめ、よつて以て我國に於ける統計學の最も健全なる發展を促進せしめんことを期してゐるのである。従つて「講究録」は眞面目に吾人と志を同じくする人士に対しては何人たりとも、解放せらるゝるのである。

吾々の立場は飽く迄も學究の徒としてのそれであるが、生き且現實から遊離するならば、學は固定、形式化して、ついに生命の泉を涸らし去るのであらう。

實務家にとつては勿論統計學は多くの手段の内

の一ツであるに過ぎぬであらう。然しそれをして最も有効ならしむるには、統計學の本質に參する他に道はないであらう。かゝる意味に於て統計學に限らずすべての學問に対してさうであるが両者が接觸合流する點に於て學は最も速く實り多くなるのである。

此の意味に於て、吾人は實務にたゞさめつて居られる人達の活奔なる寄稿を切望するものである。

それは纏つた理論でなくとも、問題の提示、問題の所在、批判等々でも觀迎するものである。又更に日本の現状に於ては智識層一般の統計學に關する正しき関心を高めること云ふことは重大なる文化運動としての意義を有すると言へば過言であらうか？ 吾人は象牙の塔に籠つたペダストであつてはならぬ。

統計學は、單なる學者の自己満足のためではなく、眞面目に生きる近代人に取つて、特に此峻巖なる現實に直面する日本の知識人に取つては、正にその人の教養を形成すべきものとして重大な要素であると信ずる。

(小川潤次郎)